

4 学年次生に対する卒業時のアンケート集計結果のまとめ

- アンケート実施日:令和6年12月23日(看護総合の試験日)
- 学生数:99名
- 試験の待機時間中に Google フォームにて実施
- アンケート回収数(率):100名回収(101.0%, 重複あり)

I. 看護学部のカリキュラムおよびシラバスの構成について

カリキュラム評価に関する項目では、19項目すべてで“そう思う”または“少しそう思う”の肯定的な回答が90%以上を占めており、昨年度に続き全体的に評価が高かった。「他学部との合同科目(IPE)の教育内容について満足している」の項目は、“あまりそう思わない”の回答が10.0%であり、他の項目と比較すると低い評価であった。これは、昨年度と同様の項目であり、評価も同程度(昨年度12.4%)であった。

自由記載欄の回答は少なかったが、評価が分かりやすかったとの意見があった。

II. 看護学部のディプロマ・ポリシー(学位授与方針)の達成状況について

ディプロマ・ポリシー各項目の達成状況の平均は、3.28~3.51であり、昨年度(3.33~3.55)と同様の結果であった。すべての項目で9割以上の学生が“4点”または“3点”と評価しており全体的に高い評価となっている。項目のなかでは「看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる」の達成度が最も高く、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」が最も低かった。これは、例年と同様の結果であった。

III. 看護学部での学生生活のサポートについて

サポートに関する項目では、14項目中12項目で“そう思う”または“少しそう思う”の肯定的な回答が80%以上を占めており、全体的に評価が高かった。そのなかで、「科目担当者の学習支援体制は整っていた」(99.0%)、「実習室の学習環境は整っていた」(99.0%)、「図書館の学習環境は整っていた」(99.0%)、「医心館の学習環境は整っていた」(99.0%)は特に高い評価であった。評価の低かった項目(“そう思わない”または“あまりそう思わない”と回答した者が多かった項目)は、「e-ポートフォリオ(Mahara)は活用できた」(62.0%)、「大学生としてのマナー講座は役立った」(21.0%)であり、「国家試験対策は役立った」(19.0%)の評価は改善(昨年度30.9%)していた。

自由記載欄の回答は少なかったが、就職支援に関して教員がどこで臨床を経験していたかを知ることがあれば相談しやすかったとの意見があった。

IV. 看護学部での学生生活の満足度について

学生生活の満足度は、平均値が81.9%であり、令和3年度の73.6%から上昇を続けている。満足度の理由には、生活の充実、環境、実習、教員に関することが多く挙げられた。満足度の高い理

由には、充実した大学生活、整備された学習環境、教員のサポート、友人関係などが挙げられた。満足度の低い理由には、勉強が大変だったことや授業内容に関することが挙げられた。

【見出された課題と今後の対応策】

カリキュラムおよびシラバスの構成

「14. 他学部との合同科目 (IPE) の教育内容について満足している」の項目が他の項目と比較して低い評価であった。旧カリキュラムの IPE は、各学年の特定の 1 科目内で 2 コマの多職種連携教育として行われてきた。新カリキュラムでは、IPE がチーム医療論として独立するとともに、薬学部に加えて管理栄養学部など他学部からの参加も増加していることから、今後はより多職種連携が意識づけられると考えられる。新カリキュラムとなり評価がどのように変化していくかを継続的に確認していく必要がある。「16. 学生の個々の特色を伸ばす教育が提供されている」の評価は、例年低い傾向にあったが、今年度は改善が見られた。少人数のグループで展開される授業は、個々の学生の特色を捉えやすく、ゼミ形式の授業などで個性を伸ばす教育が実践されてきたと考えられる。COVID-19 感染対策の制限が緩和され、対面での教育が実践できるようになったことも一因と考えられる。次年度以降も、ゼミ形式に限らずその他の講義でも、個々の特色を伸ばす方法を模索し実践していく必要がある。

ディプロマ・ポリシーの達成状況

昨年度と同様に全体的に評価が高かった。カリキュラム、シラバスの構成の評価では、教育内容について満足しているという肯定的な評価が多く、教育内容や学習環境の充実がディプロマ・ポリシーの達成に寄与していると考えられる。ただし、この評価は卒業時の自己評価に基づいているため、今後実施される卒業アンケートや就職先に対する調査も含めて検討が必要である。各項目の評価が高いなか、最も評価が低かったのは「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」の項目であった。これは例年同様の結果であり、他のアンケートでも同様に低い傾向が見られる。引き続き、教養ゼミナールや卒業研究などのゼミ形式の授業に限らず、様々な講義を通じて、学生の科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的な思考を強化する取り組みが必要である。

学生生活のサポート

「11. e-ポートフォリオ(Mahara)は活用できた」の評価が低かった。ICT 化に伴い、ポートフォリオとして活用可能なツールが多様化している影響も考えられるため、学生がどのようにポートフォリオを管理しているか確認し、必要に応じて支援していくことが必要である。次年度の卒業生は、講義資料のペーパーレス化が導入された学年であり、近年、大学における ICT 化が進んでいる。学生に対しては、これまで ICT 化へのサポートを実施してきたが、今後はそのサポートに対する評価も行っていく必要がある。国家試験対策やマナー講座などにおいて学生委員会との情報共有も必要である。

学生生活の満足度

学生生活の満足度の平均は、80%を超えておりここ数年上昇を続けている。今年度の卒業生は

COVID-19 流行の影響を受けた時期に入学した学生であるが、感染対策による様々な制限が徐々に緩和されたことで、学業や部活動、友人との交流など充実した大学生活を送ることができたと考えられる。満足度が高い理由として、大学の環境面に関する意見が多く挙げられた。学生生活のサポートの評価においても、実習室、図書館、医心館などの学習環境が整っていたことが高い評価となっており、学習環境の充実が高い満足度に繋がったと考えられる。学習環境のさらなる充実、学生生活の満足度向上に寄与すると考えられるため、自主学習のための教室開放や実習室での自主練習の環境整備を更に進めていく必要がある。また、教員の関わりも満足度に大きく影響しており、自由記載には「親身になって指導してくれる先生が多かった」、「学生の主体性を尊重している」などの意見が挙げられた。引き続き、学生個々に合わせたきめ細かなサポートを提供していくことが求められる。

本調査の結果から考えられる今後の課題

1. ディプロマ・ポリシー達成状況の評価が高く、自己評価に偏っている可能性も考えられるため、卒業後のアンケートや就職先からのフィードバックの結果も含めてカリキュラムを評価していく必要がある。
2. 学習環境の充実や教員のサポートが学生の満足度に結びついているため、引き続き学習環境や学生へのサポート体制を整備していく。
3. 教養ゼミナールや卒業研究だけでなく、各講義科目においても学生の科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的な思考の強化に繋げる取り組みが必要である。
4. 次年度の卒業生は、新カリキュラムに移行し、講義資料のペーパーレス化が導入された学年である。新カリキュラムへの移行によるカリキュラム評価の変化やICT化に関するサポートについても評価を行っていく必要がある。